

高等科（女子部・男子部）

飛び級社会人

竿代誠二 高松功太郎 山本太郎

2023 年度から高等科では本格的高校生インターンシップ制度「飛び級社会人」をスタートした。高 2（24 年度からは高 2・高 3）生徒全員が、正規カリキュラムとして企業・団体に出向き学外で活動する同プログラムは「共生学」の高学年向けプログラムに位置付けられており、ほかに類を見ない試みである。

1. 導入の趣旨と経緯

以下の理由により 2021 年度末から同プログラムの検討をスタートした。

- ・「共生学」のカリキュラムを策定するにあたり、校内で学んだ生徒がより活動の幅を広げてリアルな社会問題に向き合うために学外に出る仕組みを創りたい。
- ・学校を「学びのコミュニティー」「ごちゃ混ぜのラーニングセンター化」していくために、学年や性別の混合はもとより、「校内」「校外」の境目も希釈化していきたい。
- ・本校の魅力を多くの人に知っていただく際に、ほとんどの学校のように進学率や進学先を成果として誇るのではなく生徒の人柄やバイタリティー自体を見ていただきたい。そのために生徒が外に出て多くの方と関わる機会を構築したい。

常任理事の景山和憲氏のご紹介で株式会社博報堂ケトルのトップクリエイター原利彦氏、皆川壮一郎氏がクリエイションを引き受けてくださり、実装段階の調整業務は一般社団法人 FORA の皆さまにサポートいただいた。

校内では広報室長の小泉保氏を筆頭に、共生学実装担当の竿代、高松、カリキュラム開発担当の山本が準備チームに名を連ねた。

2. トライアル

2022 年度にはトライアルを行なった。博報堂ケトルのクライアント企業を中心に 7 社にご協力をいただき、高 2・高 3 生徒を集めて趣旨を説明したうえでエントリーを受け付けた。31 名の生徒が応募したが、選考のうえ 18 名の生徒を派遣した。実施期間は約 2 ヶ月と短かったが、派遣先、参加生徒、校内のいずれからでも有効なフィードバックを得ることができた。また参加生徒の変容は目覚ましく、この取り組みの意義を証明することができた。

トライアルの派遣先は以下の通りである。（順不同）

株式会社 カンロ	小杉湯	コミュニティ FM 渋谷のラジオ	本屋 B&B
特定非営 利活動法 人 CLOUDY	sio/シズル	公益財団法人 WWF ジャパ ン	

3. 23 年度の実装

トライアルを踏まえて 23 年度からの本格実装に着手した。生徒約 80 名分の派遣先を開拓することが大前提として求められた。博報堂ケトルのみに依存することはできないため、担当教員は全国各地に足を運び、交渉を重ねた。派遣先開拓にあたっては「共生学」のコンセプトや、その上位概念として学園が掲げる「人との共生」「自然との共生」を体现している企業・団体に受け入れていただくことを意識した。結果として 21 もの素敵な企業・団体にご協力いただくことができた。（別掲）

実装に向けた事務的な手続き、生徒への告知も並行して行なった。10 月末から 2 月末まで、原則として毎週水曜日に 80 名もの生徒が学外に出ることは前例がないため、食事提供や連絡体制の構築など調整は細部に渡った。生徒には 9 月に派遣先を公開、希望を募り、選考を行なった。配属先の発表は緊張感に包まれ、歓声があがった。

この取り組みを発信するため、派遣開始に先立って自由学園明日館にて「出発式」を行なった。派遣生徒、派遣先の受け入れ担当者が列席して、東久留米市副市長の荒島久人氏に来賓挨拶をいただき、博報堂デザインの前崎裕生氏（本校卒業生）からご自身が手がけたロゴデザインを発表していただいた。学内で準備を重ねてきた生徒たちも、場所を変えてメディアや派遣先の方々に囲まれることで一

層自覚が芽生えたようであった。

4. 実際の活動

派遣先は「定期」と言われる毎週水曜日に学校から出向くコースと「短期集中」と言われる宿泊して一定期間に行なうコースに分かれた。「定期」は 2 時間目が終わってからお弁当を受け取り、三々五々派遣先に向かった。電車を乗り間違えたり、出発が遅れることのないよう、生徒たちのあいだでも呼び掛け合っている姿が見られた。担当教員と FORA は分担して派遣先を巡回したが、生徒の活動リズムを乱さないように短時間でお暇することがほとんどだった。各回の終了後には生徒たちにオンライン上で日報を記載してもらい、実態の把握に努めた。「短期集中」は教員が同行して一部の活動を共にした。寝食を共にすることで、派遣先のスタッフの方々と、参加生徒同士も、通いとはまた違う深い関わりが生まれ、得難い体験になっていた。なかには「定期」と「短期集中」の双方にエントリーする生徒もあり、全く異なる世界を二つ体験することでまた新たな刺激を得ていたようであった。

5. アプレntィスシップフォーラム参加

24 年 1 月には一般社団法人アスバシ主催、FORA が共催するアプレntィスシップフォーラムに、ケトル原氏と本校教員山本、そして活動中の生徒 7 名が参加した。生徒たちは事例提供として活動の様子を発表し、原氏と山本はパネルディスカッションに登壇した。超人手不足社会における学校と社会の接続をテーマとする同フォーラムにあって、職業訓練としてのインターン活動ではない、生き方を見直したり世界を広げるための本校の取り組みは異質であったが、だからこそ資本主義社会の経済論理に巻き取られないことの必要性を強く感じる場面となった。

6. 学びの共有会とクロージングセレモニー

派遣期間の終了が近づくにつれ、どのように学びを振り返り共有するかも固めていった。3 月上旬に行なう「学びの共有会(まなコレ)」のうち半日を割いて、全派遣先の活動報告を行うこととした。生徒は派遣先に報告内容を確認していただきながら 10 分ほどのプレゼンを作成した。参加者だけでなく、高 1 以下の在校生にも活動の魅力を伝える機会となった。また普段はお互いの活動を知る機会が限られる当事者の生徒たちも、他派遣先のプレゼンを聞いて多く

のを感じたようだった。

派遣先のひとつ「北軽井沢きたもつ」で活動する生徒は、同社の魅力的な施設や豊かな自然環境を活用してイベントを運営したいと考え、飛び級社会人のクロージングセレモニーを同社の施設「TAKIVIVA」で開催することを計画した。生徒、派遣先ご担当者に加え、チケット販売サイトで一般向けに公開して、収益化を目指した。3 月下旬の開催当日は降雪を含む数多くのハプニングが起きたが、新しいイベント開催の形を模索できたことは、何より運営にあたった生徒にとって素晴らしい学びの機会となった。

7. 次年度の展望と課題

次年度は 2 学年約 170 名に対象が拡大するため、更なる派遣先の確保が喫緊の課題である。またそのように多くの生徒を派遣するなかでも一人ひとりの生徒の学びや成長にフォーカスする視点は保ち続けなければならない。そして前述のようにこの取り組みを時代や社会のニーズに短絡的に寄せることなく、本校の学びとして実施することの意義を絶えず中心に置くことが大切である。今年度派遣先のご担当者さまからは生徒の姿勢や資質に賞賛をいただくことも多かったが、温かくも厳しいご指摘をいただくこともあった。それらのお声の一つひとつを受け止め、改善していかなければならないと感じている。

8. 謝辞

派遣先企業・団体のご担当者さまは、長期間に渡り本校の生徒に向き合い成長を我慢強くサポートしてくださった。また博報堂ケトルと一般社団法人 FORA の皆さまのこのプロジェクトへのご尽力には本当に頭の下がる思いでいる。校内の各部署、派遣対象学年の学年担任、保護者の皆様も、実務的な面から生徒の心理的なサポートまで多くのお力をいただいた。全ての関係者にこの場を借りて感謝をお伝えするとともに、2024 年度も一層のご協力をお願いしたい。

9. 派遣先企業・団体一覧

秋田緑花農園	JYU アフタースクール	株式会社太田出版
カンロ株式会社	有限会社きたもつ	特定非営利活動法人共働学舎
特定非営利活動法人 CLOUDY	株式会社クルメディア「TOKYO854くるめら」	KDDI 株式会社
小杉湯	自由学園しのめ茶寮	自由学園明日館
コミュニティ FM 渋谷のラジオ	ナッジ株式会社	BS12「BOOKSTAND.TV」
ホテル金甚	本屋 B&B	一般社団法人まちにわひばりが丘
みらいくほいくえん	モグショア合同会社	ワンメディア合同会社

10. 活動紹介動画

派遣先の一つ、モグショア合同会社が制作した紹介動画は以下の URL あるいは QR コードからご覧いただける。

<https://youtu.be/syRZFVFxPKA?si=K1OQNO2GIYW2TfoU>

